

連載⑦  
内海善雄の  
「やぶ睨み」論  
「ネット社会」論

日本人を元気にするために  
脱却すべきは「一億総○○」

「一億総白痴化」は大宅壮一の名言である。もともと大宅は「二億白痴化」と言い、後に松本清張が「総」を付け加えたらしい。いずれにせよテレビが各家庭に普及し、低俗番組の垂れ流しに国民が感化される様を極めて的確に表現し、一世を風靡した。

その後、世の中には多くの「一億総○○」が出現した。「一億総中流」「一億総懺悔」「一億総うつ社会」「一億総ガキ社会」「一億総ツッコミ時代」……。

笛吹けど踊らず

最近の極め付きは、「一億総活躍社会」である。しかし、これは、他の例とは少し異なるように思う。なぜなら、多くの「一億総○○」は単に社会現象を表しているのに対し、「一億総活躍社会」は、国が意思を持って実

キングが楽しくなった。若い頃からスポーツ好きであつたらだけ人生が楽しく、また健康に過ごせたのだろうかと思う。

ジュネーブの小学校の運動会は、近くの公園に皆でピクニックをし、好き勝手にゲームなどをして遊ぶだけである。集まる時間も帰る時間も自由。強制的な団体行動は一切ない。ジュネーブでは小学生の段階で上級学校へ行く者と職業学校へ行く者とが分けられる。日本のような大学受験のための受験勉強とい



まだまだ均一化を求める企業が多い

現しようとしているものであり、いわばスローガンである。その意味では「一億総玉碎」と同じだ。昔のことはよく分らないが、古い映像フィルムには、「一億総玉碎」と進軍ラッパが鳴り響いた時、催眠状態にあつた国民が玉碎に向けて進む姿がある。

しかし、今日「一億総活躍社会」とラッパが鳴り響いても、なんだか空虚である。皆が活躍し、元気になるのは大変結構だが、笛吹けど踊らず、国民は覚めている。直感的に「何か変だ、こんなことで総活躍ができるわけがない」と感じているのではないだろうか。

個性を認めない日本の社会慣習

八年間のジュネーブの国際機関での勤務を終えて帰国し、一番異様に感じたことは、講演会の会場がダークスーツを着た黒髪の男性だけで、まるで同じマネキンが並んでいたことである。国際社会でいろいろな人種や服装、女性もたくさんいるバラエティーに富んだ人たちの集団を相手にしていたから、その異様さはまるで安物映画に出てくる「狂った天才博士」の基地の兵隊たちのように感じた。

うものがなく、能力に応じた好きな勉学や職業を選ぶ。そのような中で自然と個性が尊重される。

欧米では、自分が他とは異なるように服装や化粧にも気をつかう。日本では、皆と同じになるよう流行に遅れまいとする。個性を主張して茶髪や奇抜な服を着ると瞬く間に異端視されてしまう。

個人証明証のことはIDカードと呼ばれるが、Identityとは、他と区別して識別することである。日本では、身分証明証。どのグループ(身分)に属するか証明するものである。したがって企業や大学が発行する。自己紹介は、「○○会社の△△です」となる。△△は忘れられても、○○会社だけは覚えてもらおうとする。一方、中学校で最初に習った英語は「I am Jack Smith」であつた。他と区別する名前が重要なのである。

上からの押し付けでは実現できない

「一億総○○」と、皆が同じように振る舞う現象は、明治維新によって世界でも珍しい極端な一極集中型の国家が建設された結果だと思ふ。藩ごとに独自の文化が育まれた江戸時代の日本は、文明開化とともに堰が壊れたように一気に均一化した。多数の民族が混血して成立した日本民族には、成立の過程で同一化のDNAが強く組み込まれたのかもしれない。

その異様さは、某一流企業の役員として株主総会に出席した時、頂点に達した。会場のホテルは全員が真っ黒い背広を着たスタッフと役員で、薄色の夏服を着た筆者はまるで異星人だつた(翌年の株主総会には筆者も黒い服を着て出席せざるをえなかつた)。

大学に講義に行くと、自由闊達な学生たちに出会う。目のやり場に困る超ミニスカートのもたくさんいる。その学生たちが就職活動を始めると、皆、一斉に就活スーツを着る。「面接は、他よりいかに優れているか訴える場ではないのか」と尋ねると、「会社は個性ある人材を求めている」と口では言うが、本当は会社の風習に素直に従う人間を求めている。就活スーツを着て行かないと不合格になると思う」と答える。就職活動を機に彼らの規格化が始まるのである。

孫の小学校の運動会は、練習に次ぐ練習で可哀相だ。筆者も小学生時代、毎日、毎日、ラジオ体操と相撲体操(母校の伝統、ふんどし一つの裸で相撲の型を行う)の練習をやらされた。この強制的な拷問で、すっかり運動嫌いになった。老人になってからやっとトラウマから解放され、ゴルフや近くでのトレッ

さらに戦後民主主義により、ますます均一化が望ましい姿として求められたように思う。その結果は、目を覆いたくなるほどの平等主義と横並び意識、そして没個性である。

大量生産の工業製品で世界を制覇した日本は、一億の優秀な均質な人材が強みであつた。しかし、中国やインドなどが発展した今日は、これでは彼らに対抗できない。日本は、大量生産商品にはないデザインや機能、特殊な技術や才能などで勝負することが求められていると思う。彼らとは異なる力を発揮できて初めて日本人は元気になり、活躍できるのではないか。

そのために必要なものは、芸術的な感性やひらめき、他では見られない輝く才智など同一化では得られないものばかりだ。「一億総○○」とはまるきり逆の方向のように思う。各人が豊かな個性を涵養できる環境があつて初めて実現できるものである。

「一億総活躍社会」がその点を見失つと「一億総スキャン」の施策となりかねない。



内海善雄(うつみ よしお)  
1942年香川県高松市生まれ。東大(現な法大)法学部卒。東芝を経て66年郵政省(現総務省)入省。電気通信の自由化など、国際電気通信連合(ITU)事務局長就任。現在は一般財団法人「海外通信・放送コンサルティング」理事長。IEEE名誉会員。